

第6回：ヘルシンキの児童福祉施設



ヘルシンキ市の少し郊外にあった高齢者センターから市街地に帰り、ビルが林立する中心街でバスを降りる。ビルの一

角、中が見通せるシャツタの鍵を開けて入ると、中庭のようになっており、その奥に、今回見学させて頂いた市立カンピ保育所があった。アンナマイヤー所長の説明によると、この保育所は一九九一年に設立された統合保育所である。「統合」というのは、健常児と障害児が一緒に保育を受けるもので、フィンランドでもまだまだ少ないそうである。同保育所では、五十七人を、三歳以下のグループ十二名、三〜五歳の二つのグループ二十一名、そして二つの統合グループに分けている。統合グループは、障害児が五名と健常児七名で一つのグループを形成、軽度の知的障害・自閉症傾向の子がいるグループと言語聴覚障害を持った子がいるグループに分けている。統合保育をする保育

士は専門の研修を受けなければならぬが、その数はまだ少ないという。

フィンランドでは出産前からの妊婦へのケアを実施しており、その過程で、ドクターによつて生後早いうちに子どもの障害を認識することが出



思い思いに過ごす子どもたち

来る。そして保育所に入れる際、専門家・親・保育士で相談し、その子に合ったプログラムを作っていく。入所した子の保育計画を作成することが法的に決められており、またヘルシンキ市にも保育の規定があるそうで、それに沿った計画書を作っていく。そして年二回、統合保育所の代表者が集まってケース検討をしているという。延長や夜間保育については、また別に専門対応の保育所がある。園児一人一人に合った保育を工夫し、障害児も健常児も同じように扱う。子どもたちが環境に合わせるのではなく、環境を子どもたちに合わせるのだ。

私が所長の説明を聞いてみると、保育所の子どもたちが部屋の天窓から覗いたりして、異国から来た奇妙な集団に興味津々のようだ。それならと、私たちが子どもたちの方へ。お昼寝をしている子もいるし、おやつを食べているグループもあった。一人の男児がこちらへ何か一生懸命に言っている。よく聞いてみると片言の英語で、こちらの名前を尋ねている。みな、友好的であった。また、保育所の裏には高齢者施設があり、ここから食事を運んでくるので、保育所の中には厨房施設はない。ときどき高齢者との交流もでき、環境的には恵まれているようである。

さて、日本ではゼロ歳児保育も多いが、フィンランドでは育児休暇の利用が当然なので、九カ月児くらいはいることもあるが、ほとんどの場合、育児休暇が終わってから保育所に預けるのだという。育児休業中の保障がしっかりできていてこそその現状といえる。また、就学前に近隣の小学校などと入学後の方針などを話し合うそう。最近では日本でも障害児と健常児と一緒に保育する園が増えており、小学校、幼稚園とも連絡を密にして連携を強めている保育園も多く有る。ただ、一人一人に合った保育プログラムを作成しなければならないというのは、日本で取り入れてもよいのではないか。また、障害を持つ子の個性を見極め、伸ばしているのが、みんな素直で明るく、笑顔が印象的だった。